幼児の理解力と表現力（3）^{i・ii}

～自分を見分ける力～
○磯友輝子・坪井寿子・藤後悦子・坂元昂
（東京未来大学こども心理学部）
キーワード：自己認知、他者認知、幼児

Abilities of recognition and expression in young children (3): self-identification skills
Yukiko ISO, Hisako TSUBOI, Etsuko TOGO, and Takashi SAKAMOTO
(Child Psychology Department, Tokyo Future University)
Key words: self-perception, person-perception, young children

目 的

豊かな自己概念を形成し、主体的に生きていくためには、最初の一步として「自分」の存在に気づく必要がある。それにより、自らの考えを客観的に理解し、自己と他者の思考過程の相違を自覚させ、他者を理解することにつながる。それゆえに、どの発達段階において自己認知が芽生え始めるかが注目される。

これまで、鏡を使ったルージュ課題実験から、概ね1歳半～2歳ぐらいまでの間に自己認知が芽生えることが報告されている(e.g., Amsterdam, 1972)。これに対し、写真やビデオ内の自己像の判断では、4歳頃から自己認知が成立し始めることが示されている(e.g., Povinelli, 1996)。写真やビデオでは時間経過の認知が確立されていないために、自己認知の難易度が高くなることが考えられる。坂元(1985)では、9人の個人写真が並ぶ中から自分を見つける課題を幼稚園児を対象に行ったところ、3歳児は自分を見つけられないが、4歳児は正面写真であれば自己認知が可能であることが示され、先行研究と一致する結果を得ている。しかし、4歳児でも横や後姿の自己認知は難しく、5歳児にならないとできないことが報告された。一方、友達の名前を当てる課題では、3歳児でも様々な方向の友達を同定できており、他者認知が自己認知よりも早く芽生えることを示している。

ところで、現在は、坂元(1985)の実験当時とは異なり、デジタルカメラやビデオカメラの普及で、リアルタイムに匹敵するほどに撮影画像の自分を確認することができる。自己像接触の機会の増加から、これまで4歳頃とされていた写真における自己認知の芽生えが早期化していることが考えられる。そこで、坂元(1985)と類似の実験を行い、自己認知能力の芽生えの年齢的な変化について検討する。

方 法

実験参加者 関東地方の幼稚園児74名が参加した。そのうち、3歳児19名(5人集団10名、5人個別4名、9人個別5名)、4歳児26名(5集団9名、5人個別9名、9人個別8名)、5歳児29名(5人集団10名、5人個別9名、9人個別10名)であった。

実験デザイン 年齢3(3歳/4歳/5歳)×写真呈示3(5人集団/5人個別/9人個別)×写真方向3(正面/横/後ろ)。写真方向のみ実験参加者内要因とした。なお、5人集団・9人個別条件、写真方向条件は坂元(1985)に準じ、5人個別条件は新たに設けた。

刺激作成 自己認知・他者認知のテストの3日前に、園児の写真を撮影した。5人集団条件では5人の園児を正面、横、後ろ方向から撮影し、A4判用紙に印刷したものを呈示刺激とした。5人個別、9人個別条件は園児を3方向から個別に撮影し、A4判の用紙に5人ないし9人の写真が無作為に配置したものを刺激とした。刺激は胸部から上が収まるように編集した。

手続き テストは個別に行われた。自己認知テストでは実験者が「○○くん／ちゃんはどこにいるかな」と教示し、実験参加者が指した写真を記録した。他者認知テストでは呈示刺激から無作為に2名を選び、「このお友達は何というお名前かな」と教示し、回答を記録した。刺激は正面→横→後ろあるいは横→正

面→後ろのいずれかの順に呈示して順序効果を相殺した。

結果 と 考察

各条件の自己認知、他者認知の正答率(%)をTable 1に示した。自己認知の正答率については、3歳児の後姿が他の方向、他の年齢と比べて低いが、正面写真については3歳児から100%正解しており、早い段階で自分を見分ける力がついていることが示された。これに対して、他者認知については、3歳児、4歳児で100%を割る条件もみられ、坂元(1985)とはいくぶん異なる傾向が示された。なお、5歳児の正答率が100%とならなかったのには制服着用の影響も考えられる。

以上から、写真内の自分認知は早い段階から容易になっていること、その一方で、他者認知に難しさが見られたことが示唆された。後者は予測していなかったことであるが、遊びの個別化が進み、友達の様々な姿を捉える機会が減ったことや、入園する幼稚園が近隣に限定されなくなったことで遊び友達が多様化し、一人の友達との接触機会が減っている影響が考えられる。さらには、少子化により養育者からの注意が子どもへ向くことで、子ども自身の自己への注目が高まったとも考えられる。

ただし、本研究で測定した自己認知が、自己概念の形成へのつながりをもたらす自己認知と言えるかどうかは定かではない。ここで得られた写真内の自己の同定が、心の理論へとつながる他者への共感性やメタ認知とどのような関係にあるのかは、今後の検討課題である。

Table 1 年齢・条件別の自己認知および他者認知の正答率(%)

		5人集団条件			5人個別条件			9人個別条件			平均 正答率
		正面	横	後	正面	横	後	正面	横	後	
3歳児	自己	100	100	100	100	100	75	100	100	80	95.0
	他者	95	85	90	75	75	100	80	100	100	88.9
4歳児	自己	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
	他者	75	83	75	78	83	94	69	100	69	80.7
5歳児	自己	100	100	100	100	100	90	100	100	90	97.8
	他者	85 _{※1}	95	95 _{※2}	100	100	89	100	100	85	95.6

刺激に双子含まれ、その間違いを除くと※1は95% ※2は100%となる

引用文献

Amsterdam, B. (1972). Mirror Self-image reactions before age two. *Developmental Psychology*, 5, 297-305.
Povinelli, D.J., Landau, K.R., & Perilloux., H.K. (1996). Self-recognition in young children using delayed versus live feedback: Evidence of a developmental asynchrony. *Child Development*, 67, 1540-1554.
坂元昂 (1985). 幼児の世界をさぐる フレーベル館
(Yukiko ISO, Hisako TSUBOI, Etsuko TOGO, & Takashi SAKAMOTO)

ⁱ 本研究は平成20-22年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(A))(代表：坂元昂 課題番号・20240071)の助成を受けて行われた。
ⁱⁱ ご協力いただいた栄光幼稚園の皆さん、東京未来大学の石井徳子さん、麻生菜奈さん、学生の皆さんに御礼申し上げます。